
界律小貢

水沢 流

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

界律小貢

【Zコード】

N2741Z

【作者名】

水沢 流

【あらすじ】

願いは虚ろな形を纏い、形はやがて意思を持つ
「ここが願いの終着点」の設定・サイドストーリー置き場です。

人物紹介・世界設定（1-3話時点）

「登場人物」

【晴子】

主人公。黒髪をショートカットにした男勝りの少女。
基本、浮き沈みの激しい性格で、コントクトを外すとD級の近眼。
Jのヘッド。元不登校児。

【J】

晴子のゲシュペNST。
黒髪赤目のワイルド。
性格・ノリ共に非常に軽く、時々（晴子の世界で言う所の）常識
に欠ける。

【アデリア】

ゲルナームに落ちてきた晴子を拾い、Jを固定した張本人。
ボディラインが映える黒のバトルスーツを纏い、生身でクリーチ
ヤーと渡り合う「魔女」。
元・枢機卿^{カーディナル}。

【ライサ】

アデリア専属の兵器。

本来は量産型だが、改造を施したのがアデリアなので無駄に高性
能。

【ツアーラ】

学院のミーディアム。カラーはオリーブ。

黒髪灰眼の強気な少女。

【ミゲル】

商店街の地下に店を構える武器商人。
やや紫がかつた白銀の髪に緑目。
物腰穏やかな優男。

- - - - - - - - - -

「用語＆世界設定」

【ゲルナーム】

関わる者いわく「正しく歪んだ世界」。この小説の舞台。
各文明（存在すると信じられた幻想世界も含む）の特徴を再現し
たコロニーが無数に点在する。

【ゲシュペNST】

ナイダスを塞げる数少ない種族。
ファウンテンヘッドが精神活動している時だけ存在可能。

【ナイダス】

時々発生する時空の歪み。ゲシュペNSTだけが塞げる。
これが発生するとコロニーの「理」が歪み、異形の巣窟と化す事
が多いため、これができると住民は避難を余儀なくされる。

【ファウンテンヘッド】

異世界から時折、ゲルナームに落ちてくる来訪者。
ゲルナームのスラングで「ヘッド」と呼ばれる事もある（対して
ゲシュペNSTが「テイル」と呼ばれる事もあるが、こちらは主に
侮蔑の意）。

【ミーディアム】

物質と靈素のバイパスを構築できる技術者。

戦闘訓練を受け、ナイダスに赴く兵士になる事もある。
能力に応じて一カラ（階級）が存在し、青が最下級・赤が最上級。

発生したゲシュペNSTを探し、器に固着する技術も持つ。

【界律倉庫】

ファウンテンヘッドがゲルナームに落ちる瞬間にゲシュペNSTが発生する、と言う事を提唱した初代ミーディアムが開いた仮想世界のアーカイブ。

ナイダス、ミーディアムなどの立場名をつけたのも初代ミーディアム。

ゲシュペNSTだけは、自分がゲシュペNSTであると言う事を認識して生まれて来るので、特に改めて名は振られていない。

ウイグリドのIRISから接続可能。

【学院ウイグリド】

ミーディアムの養成施設。

西洋の城に似た本校舎を中心に、以下の四つの棟を持つ。

【REGULUS】

メタリックな外見の棟。通称獅子棟。

主に銃機や機械の研究・製造に関わる場所。

【VOLUTE】

いくつもの歯車が噛み合った棟。通称螺旋棟。

俗に言う鍊金術に関係する場所。

【SERPENT】

ぱつと見た感じ巨大な樹にも見える棟。通称竜蛇棟。

幻獣や生物に関わる場所。

【IRIS】

実体の曖昧な棟。靈素棟。

直接アクセスする能力が無い者は、通信メディアを通して接続する事になる。

人物紹介・世界設定（1~3話時点）（後書き）

短編だと追加出来ない事によつやく気付き、改めて書き直しました

：（汗）

相変わらず機能に右往左往しております、ご迷惑おかけします。

形成（前書き）

一話完結。

アデリアとの初対面。

形成

そこは、濃密に^{じゅう}蕩けた混濁だった。

氣体と呼ぶには重く、固体と呼ぶには流動的な闇。息をすれば喉が詰まり、目を開けば瞳を溶かされる心地すら覚え

兼ねない、異質にて異様な空間。

時折、擦れ合う成分がギチギチと喚く

そこに、ふと、二つの意識が灯つた。

一つは有形、一つは無形。

その無形に、有形が糸を纏わせるが如く干渉する。

「…」

声とも音とも付かぬ干渉が数回行われた時、無形は初めて呼吸をした。

無形が有形を認識する。

コンマ数秒

突発的に、形を得た無形が吼えた。^{なり}

開いた手の中に戰斧を招き、漆黒の空間を蹴り駆ける無形。

ギイツ！

刹那、不快音の「ーラスが、有形の頭上目掛けて進つた。

「見事な産声ね」

有形が声を発する。

緊迫を始めたそれは、ノイズ交じりの女の声。

闇を軋ませて迫る斧を、有形が頭上に掲げた剣で阻む。ギイン！

衝突点から散つた光の飛沫が、有形のシルエットを照らし上げた。

『 飛来せよ』

声の上に声を重ねる、有形の一 声福音のハーモニー。

『 傀儡の狗いぬ、魂の狩獵者。我が真名マナにて疾く吠えよ…』

直後、無明にマズルフラッシュが炸裂した。

閃光爆音、十字砲火で無形へと浴びせられたのは弾丸の洗礼。獲物に群がる獸が如く、弾幕が無形を覆い尽くす。

有形の目前で。

無形の腕が、指が、そして顔が碎け散つて水音を撒いた。かくして千切れた肉片と血が、高低の位置疎らに流れ、滯る。半ばまで消し飛ばされた顔を中心に、四方八方に朱の糸を伸ばして沈黙する無形。

そこに、有形のシルエットが舞い降りた。

無形は死んではいない。

その証拠に、赤い瞳が有形を見ている。

頭蓋まで碎かれても、無形には未だ意識があった。

「 …お目覚め？」

惨憺たる姿の無形へと、有形が問う声が闇に滲む。

「……ああ

なかなか刺激的なモーニング・コールだった、と。
けぶる血煙の中、無形の崩れた顔が不敵に笑つた。

第一話・三人称（前書き）

元々、こんな感じで第一話を書いていました、つて事で（・・・）一人称と三人称の両方書いてみて、何となく晴子の性格的に一人称の方がテンポ良かつたので、本編（<http://ncode.syosetu.com/n6804y/1/>）が一人称で進行しております。

第一話・三人称

銀月の浮く夜の下、荒涼とした風が吹き抜ける

地から聳えるビル内に人の気配は無く、在るのは異形の姿をした者ばかりだった。車は動かず、信号は狂い、地を満たした鮮血の色が排水溝へと流れ込んで行く。所々で上がった煙が有機物と無機物を焼き焦がした匂いを絡め、空気を緩慢に濁して行く。

有象無象の死が溢れる都市の廃墟。

そこに、爆発音が一つ炸裂した。

「イヤツハア！」

窓を碎き、コンクリを割り、爆風と共に夜空へと跳躍を成したのは男。

年の頃からすると二十歳と少しか。野生的な赤の瞳を持つ黒短髪の長躯で、引き締まつた体躯は獣を思わせる。黒のライダースーツの所々を金属で飾つた姿は、所謂ゴシックメタルの服装に近く、肌蹴た胸元から覗く胸板もまた、野生的な隆起を晒している。

その男が手に掴んでいたのは、一匹の異形だった。

高々と振り上げたそれを地面に叩き付け、衝撃で舞い散つた砂塵の中へと、一拍遅れてその男が着地する。靴底に叩かれた瓦礫が軋み、耳障りな音を立てる。

男の着地点の直ぐ近くに居たのは一人の少女。

黒目に黒髪、小柄な体。容貌としては可も無く不可も無くと言つた中肉中背で、髪は短く切り詰めている。肌の色は東洋系にありふれたもので、服装は上がシャツの上にジャケット、下がジーンズにスニーカーと言うボーイッシュなスタイル。目の前に落ちた異形の死体を見ても悲鳴一つ上げない辺りは度胸が据わっているとも言えますが、単にそうした物に共感すると言つ部分が、すんと欠けていようのような雰囲気でもあつた。

「ただいま、セーラー」

少女に向けて、男が声を発する。

セーラーと呼ばれた少女が、それに応じて笑みを向けた。
その唇がゆっくりと開き、帰還を迎える台詞を象る

「死ねばいいのに」

セーラーと呼ばれた少女は、正しく書くと晴子となる。

出身は異世界。最も、ここ、ゲルナームにとつての異世界と言つだけであつて、要するに日本の片隅である。そして立場上は学生だつた。

彼女が此處に来て、パートナーとなつた男が。人によりジャックやジヨーカーなど呼び名が変わる為に、で通じる。見た目は良い部類と言つて差し支えない。晴子自身、これが元世界に居たら女子に追いかけられるスタイルだと認めるに至つている。

ただし、晴子自身は彼を追いかける気が無い。寧ろ、毛嫌いしていると言つても過言ではなかつた。

彼女は男が嫌いなのだ。生理的に鳥肌が立つ程ではないが、男と言つ生物全般に対しても良い感情を抱いていない。それにも関わらず、が気楽に絡んで来るものだから、好意などそこに生まれる筈もなく、結果として険悪なムードが膨れ上がるばかりだった。

「ちょっとは愛想良くしようぜー、レディ」

フランクな声を投げるに対し、晴子が返したのは睨みの視線。「ビルまる」と吹つ飛ばしといて良く言つわ。謝れ。とにかく謝れ

「そもそもうだな

「わかればよし」

「悪かつた」

軽やかに片手を上げて詫びる。

その先は晴子ではなく、先程J自身が破壊した地点だった。

「おいコラ待てや」

爆心地に謝れとは言つていないと、眉を潜める晴子の声が棘を帶びる。が、直ぐに、その棘は呆れの息に成り代わった。

飄々とした性格のJに、不平を叩き付けても効果などない。それは晴子も充分に理解している。

「……もういい、怒る氣無くした」

溜息をついた晴子が上を見る。霞んだ空の所為か、はたまた他の要因か、少し目の元に涙が滲む。それを煙のせいだと思つ事にして、晴子は肩を落とした。

「何でアンタなんかと、なあ…」

不本意丸出しの声だった。女らしくあれと言われる事への反発心が大きかつた晴子にとって、いわゆる男である事を前面に出している異性は、羨望嫉妬を含めた嫌悪の対象。

それが、よりもよつて自分のパートナーとなつてているのだから、現状の不満は推して知るべしである。

「つれねエなア。あんまり怒つてると可憐さに欠けンゼ?」

「そりゃあ悪かつたつ！」

涼しげな顔で言つすべど、晴子が反射的に瓦礫を投げる。それを片手で受け止めるJ。続けざまに明らかに余裕を示すJの態度に、晴子の機嫌の悪さが加速する。

鼻を鳴らした晴子が背を向けて歩き出せば、Jがその後を大股に追う。

容易には死はないJの存在を背の側に感じて、晴子が再び悪態を吐き出した。

「ほんつと、死ねばいいのに」

「あなたはここにいますか？」

そう問われたら、人はどう答えるだろう。
ある人は「私がいると思っているんだからい。私は手があり、
足があり、こうして発している声がある」と答えた。
また別の人は「他人が私を認識している限り、私は確かに存在す
る」と答えた。

『それ』は答えた。

人は手がなくても手があると錯覚できる。
だからあなたは、本当はいないかも知れない。
仮に存在していても、あなたが自分だと認識している姿ではない
かも知れない。

あなたが感じている痛みや喜びは、泡沫のまやかしかも知れない。

『それ』は再び答えた。

存在して欲しいと願う人の想像の中に『あなた』は存在するかも
知れないが、その人が想像を止めたら『あなた』は消える。

『それ』は嘲笑つた。

不正確なものを、正確と信じて疑わぬ者よ。

清楚混濁の混沌の水に、浸つているとも思わぬ者よ。

愚かしく愛しく賢しく聴く、そして脆くて美しい…有象無象にし
て私であり、私ではない者よ。

覚えよ、私は此処に在る。
汝らが汝で在る限り。

その声を記録した破片は散ってしまった。

ただ、それが意識の狭間に寝そべるものであると、誰かが虚ろに呟いたのみ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2741z/>

界律小貢

2011年12月28日20時56分発行